

8/18 Thu.

第654回 名曲シリーズ  
サントリーホール 19時開演  
POPULAR SERIES No.654 / Suntory Hall 19:00

指揮  
Conductor  
ヴァイオリン  
Violin  
コンサートマスター  
Concertmaster

**エミリア・ホーヴィング** -p.5

EMILIA HOVING

**三浦文彰** -p.7

FUMIAKI MIURA

小森谷 巧

TAKUMI KOMORIYA

**ラウタヴァーラ**

RAUTAVAARA

**至福の島** (日本初演) [約12分] -p.10

Isle of Bliss

**プロコフィエフ**

PROKOFIEV

**ヴァイオリン協奏曲 第2番** ト短調 作品63

[約26分] -p.11

Violin Concerto No. 2 in G minor, op. 63

I. Allegro moderato

II. Andante assai

III. Allegro; ben marcato

[休憩]

[Intermission]

**シベリウス**

SIBELIUS

**交響曲 第5番** 変ホ長調 作品82 [約30分] -p.12

Symphony No. 5 in E flat major, op. 82

I. Tempo molto moderato – Allegro moderato

II. Andante mosso, quasi allegretto

III. Allegro molto

8/23 Tue.

第620回 定期演奏会  
サントリーホール 19時開演  
SUBSCRIPTION CONCERT No.620 / Suntory Hall 19:00

指揮  
Conductor

**ユライ・ヴァルチュハ** -p.6

JURAJ VALČUHA

ピアノ

**アンヌ・ケフェレック** -p.7

ANNE QUEFFÉLEC

コンサートマスター

長原幸太

Concertmaster

KOTA NAGAHARA

**モーツァルト**

MOZART

**ピアノ協奏曲 第27番** 変ロ長調 K. 595 [約32分] -p.13

Piano Concerto No. 27 in B flat major, K. 595

I. Allegro

II. Larghetto

III. Allegro

[休憩]

[Intermission]

**マーラー**

MAHLER

**交響曲 第9番** 二長調 [約81分] -p.14

Symphony No. 9 in D major

I. Andante comodo

II. Im Tempo eines gemächlichen Ländlers

III. Rondo – Burleske: Allegro assai. Sehr trotzig

IV. Adagio: Sehr langsam und noch zurückhaltend

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）



独立行政法人日本芸術文化振興会

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）



独立行政法人日本芸術文化振興会

協力：アフラック生命保険株式会社

※本公演では日本テレビ「読響プレミア」の収録が行われます。

8/27 Sat.

第249回 土曜マチネーシリーズ  
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演  
SATURDAY MATINÉE SERIES No. 249 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

8/28 Sun.

第249回 日曜マチネーシリーズ  
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演  
SUNDAY MATINÉE SERIES No. 249 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

指揮  
Conductor

ピアノ  
Piano

コンサートマスター  
Concertmaster

ブラームス  
BRAHMS

[休憩]  
[Intermission]

メンデルスゾーン  
MENDELSSOHN

ユライ・ヴァルチュハ -p.6

JURAJ VALČUHA

河村尚子 -p.8

HISAKO KAWAMURA

林 悠介

YUSUKE HAYASHI

ピアノ協奏曲 第1番 二短調 作品15 [約44分] -p.16

Piano Concerto No. 1 in D minor, op. 15

I. Maestoso

II. Adagio

III. Rondo: Allegro non troppo

交響曲 第3番 イ短調 作品56 〈スコットランド〉

[約40分] -p.17

Symphony No. 3 in A minor, op. 56 "Scottish"

I. Andante con moto – Allegro un poco agitato

II. Vivace non troppo

III. Adagio

IV. Allegro vivacissimo – Allegro maestoso assai

指揮

エミリア・ホーヴィング

EMILIA HOVING, Conductor

フィンランドの新星が  
祖国の自然美と生命の  
息吹を表現する



©Laura Oja

欧州で注目を浴びる1994年生まれのフィンランドの新星。祖国を代表する作曲家シベリウス作品などを取り上げ、母国の偉大なる自然や生命の美しさを描き出す。

クラリネット、チェロ、ピアノを学んだ後に、指揮をヘルシンキのシベリウス・アカデミーにてサカリ・オラモとアツォ・アルミラに、その後2015年からヨルマ・バヌラに学ぶ。

フィンランド放送響のアシスタントを務めていた19年5月には、エラス=カサドの代役としてブルックナーの交響曲第2番やB. A. ツインマーマン作品を指揮し成功を収めた。またそのライブ映像が配信されたことで、国際的に脚光を浴びた。現在、フランス放送フィルのアシスタント・コンダクターを務め、今年3月にはベルリン・フィルハーモニーホール公演で急病のミッコ・フランクの代役として、フォーレの組曲〈ペレアスとメリザンド〉やストラヴィンスキーのバレエ組曲〈火の鳥〉などを指揮し、その手腕が高く評価された。

これまでにヘルシンキ・フィル、ロイヤル・ストックホルム・フィル、ラハティ響、タンペレ・フィルなどを指揮し、2021/22年シーズンは、フィルハーモニア管、リール国立管、ルクセンブルク・フィル、アイスランド響、ケベック響にデビューするなど、欧州を中心に多くの楽団と共演を重ねている。21年4月には、「その年に最も活躍した若手芸術家」としてフィンランド批評家協会激励賞を受賞。今回、日本デビューを果たす。

8/18  
名曲

Maestro

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）

文化庁  
独立行政法人日本芸術文化振興会

共催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京芸術劇場

8/23  
定期

8/27  
土曜マチネー

8/28  
日曜マチネー

Maestro

指揮

## ユライ・ヴァルチュハ

JURAJ VALČUHA, Conductor



©Houston Symphony

## 欧米のクラシック音楽界を 席卷する鬼才が 読響初登場

欧州と米国で華々しく活躍するスロヴァキアの鬼才ヴァルチュハが、偉大な作曲家が最晩年に残した二大傑作プログラムと、珠玉のドイツ・ロマン派プログラムで鮮烈な読響デビューを飾る。

1976年ブラチスラヴァ生まれ。母国で作曲と指揮を学んだ後、サンクトペテルブルクとパリで学び、ムーシンらに師事。フランス国立管デビューを皮切りに、欧米で活躍。2009年から16年までRAI国立響の首席指揮者を務め、ウィーン、ベルリン、デュッセルドルフなどへのツアーでも成功を収めた。16年からナポリ・サンカルロ劇場の音楽監督を務め、同劇場の水準を高めた手腕が高く評価されている。また17年からベルリン・コンツェルトハウス管の首席客演指揮者を務め、今年6月にヒューストン響の音楽監督に就任した。

これまでにベルリン・フィル、ロイヤル・コンサートヘボウ管、ドレスデン国立歌劇場管、ニューヨーク・フィル、ウィーン響、シカゴ響、フィルハーモニア管、ミュンヘン・フィル、ピッツバーグ響など一流楽団を振るほか、ブカレストでのエネスク国際フェスティバルやベルリン・コンツェルトハウス管によるバルト三国での100周年記念ツアーなどにも参加。オペラでも目覚ましい活躍を続け、バイエルン国立歌劇場で〈蝶々夫人〉〈フィガロの結婚〉、ボローニャ歌劇場で〈サロメ〉、フェニーチェ劇場で〈ピーター・グライムズ〉を指揮するなど活躍の場を広げており、まさに大躍進中の気鋭指揮者。



©Yuji Hori

ヴァイオリン

## 三浦文彰

FUMIAKI MIURA, Violin

抜群のテクニックと情熱的な演奏で聴衆を魅了し、国際的に活躍する気鋭。ハノーファー国際コンクールにて史上最年少16歳で優勝。ドゥダメル、フェドセーエフ、ズーカーマン、カンブルランらの指揮でベルリン・ドイツ響、ロサンゼルス・フィル、マリンスキー劇場管などと共演。NHK大河ドラマ「真田丸」テーマ曲の演奏やTBS「情熱大陸」への出演も話題を呼んだ。2018年からサントリーホールARKクラシックスのアーティストティック・リーダーを務めている。21年、ロイヤル・フィルのアーティスト・イン・レジデンスを務めた。22年に「Forbes」Asiaの「30 Under 30 Asia (世界を変える30歳未満の30人)」に選出。CDはエイベックスよりリリース。楽器は、宗次コレクションより貸与されたストラディヴァリウス1704年製作「ヴィオットィ」。

国際的な舞台で活躍を続けている、現代を代表するピアノの名匠。パリ生まれ。ウィーンでブレンデル、バドゥラ=スコダらに師事。1968年ミュンヘン国際コンクールで優勝。以来、世界各地で演奏を展開。プーレーズ、ガーディナー、エッセンバッハら巨匠の指揮で、ロンドン響、フランス国立管、チューリッヒ・トーンハレ管などと共演。とりわけモーツァルトの瑞々しい解釈は高く評価され、1984年製作の映画『アマデウス』ではピアノ協奏曲を演奏して話題となった。BBCプロムス、ラ・フォル・ジュルネ、ラ・ロック=ダンテロンなどの音楽祭に出演。40枚以上のCDをリリースし、ディアパゾン・ドール賞など受賞多数。読響とは82年、2009年に共演し、今回3回目の登場。



©Caroline Doutre

ピアノ

## アンヌ・ケフェレック

ANNE QUEFFÉLEC, Piano

8/18  
名曲

Artist

8/23  
定期

Artist

8/27

土曜マチネー

8/28

日曜マチネー

Artist



©Marco Borggreve

ピアノ

**河村尚子**

HISAKO KAWAMURA, Piano

ドイツを拠点に国際的に活躍する本格派ピアニスト。ハノーファー国立音楽芸術大学在学中、ミュンヘン国際コンクール第2位入賞。クララ・ハスキル国際コンクール優勝で一躍世界の注目を浴びた。これまでに、国内外でリサイタルを開くほか、テミルカーノフ、ルイージ、ヤノフスキ、ビエロフラヴェクらの指揮で、ウィーン響、バイエルン放送響、ベルリン放送響、チェコ・フィルなど一流楽団と共演している。文化庁芸術選奨文部科学大臣新人賞、ミュージック・ペンクラブ音楽賞、サントリー音楽賞ほか受賞多数。19年には映画『蜜蜂と遠雷』でピアノ演奏を担当し話題となった。現在、ドイツのフォルクヴァンク芸術大学教授。読響とは09年の初登場以来、共演を重ねている。

## ラウタヴァーラ

〈至福の島〉(日本初演)

エイヌハニ・ラウタヴァーラ(1928~2016)は1995年、ヘルシンキ近郊エスポーの音楽学校オーケストラのために、〈至福の島〉を書き上げた。この作品は、シンプルな楽曲構造、機能的な管弦楽法、旋法的で耳に馴染むメロディー、どこか複雑で一筋縄にはいかないリズムなど、この作曲家のスタイルのエッセンスをコンパクトに盛り込んでいる。

フィンランドのヘルシンキに生まれたラウタヴァーラは第二次世界大戦後、同地のシベリウス・アカデミー、ヘルシンキ大学で学び、アメリカのジュリアード音楽院に留学する。さらに、ドイツの作曲講習会に参加、ケルン音楽大学にも在籍した。

その間、メリカント、パーセッティ、コーブランド、セッションズ、フォーゲル、ペッツォルトらに師事している。多くの作曲家の教えに触れたせいか、ラウタヴァーラはさまざまな作曲様式を、その懐に幅広く取り込んだ。

〈至福の島〉を書くにあたり作曲家は、アレクシス・キヴィの詩を下敷きにした。この詩は「平和な島への逃避行」を描いている。当の楽曲はその内容を“音による絵画”で表現するのではなく、その精神を音楽の中にこだまさせているのだという。

作品はおおむね三つの部分からなる。冒頭、ティンパニとハーブの合図で管弦楽が動き出す。打楽器がその道標役を買って出る。オーケストラは4群に分かれて響きを織りなす。それぞれ2分音符、4分音符、8分音符、16分音符を基本音価として動く。

それが4分音符へと収斂しゅうれんした後、第2部分が始まる。旋律は三連符を交えたいささか複雑なリズム。各パートがそれを少しずつ“変奏”しながら受け渡していく。受け渡しははじめ単声部間でおこなわれる。徐々にその主体が拡大、やがて管弦各群間で旋律が行き来するようになる。その行き来の輪郭がはっきりしたところで、第1部分の楽想へと戻る。最後は消え入るように曲を閉じる。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1995年／初演：1995年5月31日、ロホヤ／演奏時間：約12分  
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット、トロンボーン、ティンパニ、打楽器（ヴィブラフォン、ウッドブロック、銅鑼）、ハーブ、弦五部

## プロコフィエフ

ヴァイオリン協奏曲 第2番 短調 作品63

1917年の十月革命を嫌気して18年5月にアメリカに渡ったとき、ロシアですでに音楽家としての地歩を築いていたセルゲイ・プロコフィエフ(1891~1953)は、海外での活動を安易に考えていた節がある。実際、当初は順調だったアメリカでの仕事も、徐々に下降線をたどった。

21年、パリでバレエ〈道化師〉が大成功を収めたのを機に、同地への移住を決め、翌22年「ポケットの1000ドルと頭痛を道連れに」フランスに渡った。まもなく、ソヴィエト政府がプロコフィエフに接触を試みる。そこから時間をかけて作曲家は、郷愁を大きくさせていったようだ。

27年には一時帰国し、ソ連各都市で演奏会を催し好評を得る。一方、29年に仕事上の後ろ盾であるディアギレフが急逝したことにより、パリでの活動に影が差し始めた。故郷は自分を必要とし、パリは自分を捨てようとしている。プロコフィエフはそう感じたことだろう。結局、里心の行き着く先は、36年春の完全帰国だった。

このパリ時代末期に作曲家は、ヴァイオリン協奏曲第2番を書き上げた。35年、フランスのヴァイオリン奏者ソエタンとともに出かけた演奏旅行中、プロコフィエフは共演者のために各地で第2協奏曲の作曲に動いそいた。作品にパリへの思い入れはほとんどなく、演奏旅行先の印象、ソ連への愛着がその前面に出ている。

**第1楽章** ト音から二音への完全5度を、旋回しつつ上行する音型と、二音からト音までを逡巡しながら下行する音型とを組み合わせる第1主題とする。この“19世紀のロシア新民謡”風の旋律は以後、陰に陽に鳴り響く。

**第2楽章** 独奏ヴァイオリンの冒頭旋律を主題とする変奏曲。各パートが随時、当意即妙に寄り添う。

**第3楽章** カスタネットなどの打楽器を伴いながら、スペインの舞曲のようなロンドが続く。最後は独奏と重音の弦楽とが息長く盛り上がるが、低弦を欠くためどこか軽やかに曲を閉じる。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1935年／初演：1935年12月1日、マドリッド／演奏時間：約26分  
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、打楽器（大太鼓、小太鼓、サスペンデッドシンバル、トライアングル、カスタネット）、弦五部、独奏ヴァイオリン

## シベリウス

## 交響曲 第5番 変ホ長調 作品82

ジャン・シベリウス(1865~1957)はワグネリアンながら、オペラをひとつも書いていない。その代わりとして主戦場にしたいのが交響詩と交響曲だ。作曲家においてこの二つは陸続きだった。交響的作品の中心地であるドイツ語圏で両者は、相反するものと理解されていたが、必ずしもその範疇にないフィンランド出身のシベリウスにとって、ドイツ流のこだわりには大きな意味はない。

おもに民族的な交響詩、とりわけ〈フィンランディア〉の大成功によって作曲家は、愛国的音楽家としての地位を不動のものとする。その延長線上で交響曲第1番と第2番を書き上げた。その路線は早くも第3番で崩れる。素材は「国家(ネイション)」から「民俗(フォークロア)」へと移った。第4番では不協和音(三全音)の多用で全音階的なハーモニーを生じさせ、サウンドに緊張感を与える。

第5番は、シベリウスの交響曲書法が徐々に独自化していく、その途上に現れた。これはある種の機会音楽で、作曲家の生誕50年を祝う席のための作品。したがって、祝祭的な性格をその構想の段階から持っている。

シベリウスは1915年に曲を完成させたが、16年および19年に改訂をおこなった。16年、四つの楽章のうち第1・第2楽章をひとつにまとめ、全体を3楽章構成に。併せて終楽章を拡張する。19年には曲をコンパクトに刈り込んで、現行の姿へと調えた。

**第1楽章** ソナタ形式にスケルツォの結尾部を接ぎ木した体裁。第1主題の長短短長(タータター)と第2主題の短長短(タタータ)との共通部分である長短(タータ)を、スケルツォの基本リズムとする。トレモロの共有も聴き逃さない共通基盤。

**第2楽章** 弦楽のピッツィカート(ピッチカート)の主題を、各パートが引き継ぎつつ変奏する。

**第3楽章** トレモロと長短短長リズムを冒頭楽章から受け継ぎ疾走する部分と、管楽器が伸びやかに羽を伸ばす部分とが交互に登場する。その後、断続的な力強い和音で曲を終える。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1915年、16年および19年に改訂／初演：初稿・1915年12月8日 ヘルシンキ、改訂稿・16年12月8日 トゥルク、再改訂稿・19年11月24日 ヘルシンキ／演奏時間：約30分  
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

## モーツァルト

## ピアノ協奏曲 第27番 変ロ長調 K.595

ザルツブルクの<sup>たもと</sup>大司教と袂を分かちウィーンへと出たヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756~91)は、この地で予約演奏会を開き貴族たちの絶大な支持を獲得する。目玉となったのは新作ピアノ協奏曲の自作自演だった。

しかし1780年代半ばにピークを迎えた人気も、80年代後半には引いてしまう。同時期に起こったトルコとの戦争などにより、ウィーンに厳しい不況が訪れたことも大きく影響していただろう。それまで精力的に作曲されていたピアノ協奏曲は86年の3曲の後、急激にペースが落ち、88年の〈戴冠式〉と、作曲家が世を去る91年に完成した本作の2曲が書かれたのみだった。第27番は同年3月4日にクラリネット奏者ヨーゼフ・ベールの演奏会で初演されたが、これはモーツァルトが公の場で演奏した最後の機会となった。

がっちりとした構成をチャーミングな歌で満たした本作は、晩年のモーツァルトの音楽に共通する、体調の悪化や経済的苦境を感じさせない澄んだ明朗さを湛えている。第3楽章のロンド風の主題は歌曲〈春への憧れ〉にも転用されているが、「愛しい五月よ、おいで、そして木々をまた緑にしておくれ」という歌詞の気分は、この可憐な協奏曲のイメージにもふさわしいものでないだろうか。

**第1楽章** アレグロ そよ風のように波打つ伴奏に乗った第1主題は、管楽器の呼応に中断されながら進み、ヴァイオリンが提示する第2主題もフルートの合いの手を伴う。副主題は2オクターヴに渡って下行するなど、どこをとってもシンプルな魅力に満ちている。

**第2楽章** ラルゲット ピアノが夢見るような主題を歌いだし、オーケストラがそれに続く。中間部の旋律は平明な気分を受け継ぎながら、様々な色調を見せる。

**第3楽章** アレグロ ロンド風のはねるような主題にはじまり、独奏の華麗な技巧を挟みつつ躍動的に進む。

〈江藤光紀 音楽評論家〉

作曲：1788年頃から91年／初演：1791年3月4日、ウィーン／演奏時間：約32分  
楽器編成／フルート、オーボエ2、ファゴット2、ホルン2、弦五部、独奏ピアノ

## マーラー

## 交響曲 第9番 二長調

番号付きの9曲、番号はないものの交響曲と銘打たれた〈大地の歌〉、そして未完に終わった第10番と、計11曲の交響曲を残したグスタフ・マーラー（1860～1911）は、古典派からロマン派へという文脈に位置する最後のシンフォニストと言えるだろう。とはいえ、声楽を含めた編成や楽章構成は通常の枠に収まらない曲も多く、マーラーにとっての交響曲とは、森羅万象を写し取るための巨大な器のようなものであったかもしれない。最後の完成作となった本作も、4楽章の器楽という基本に立ち返りながらも、音響体としてのオーケストラの在り方やそこで体现される想念は極めてユニークである。

1907年にマーラーはメディアの批判キャンペーンを受けウィーン宮廷歌劇場の監督を辞任、さらに長女の死に見舞われ、自身も心臓疾患の診断を下されるなど、不幸が重なった。しかし、またこの年は指揮・創作の最後のフェーズのはじまりでもあった。年の暮れにはニューヨーク・メトロポリタン歌劇場に初登場し、翌年の初頭までアメリカで活動する。その後、冬はアメリカ、春と秋はヨーロッパで演奏活動を行い、夏は作曲に注力する形が定着し、08年の夏には〈大地の歌〉、09年の夏には第9番、そして10年の夏には第10番が生み出されていく。

第9番の作曲は次のように進められた。09年の年初をニューヨークで迎えたマーラーは、3月いっぱいまで同地で仕事（ニューヨーク・フィルとの初共演）をした後、パリを経由してウィーンに戻る。6月には妻アルマを転地療養に送り出した後、作曲小屋のある南チロルのトープラッハへ一人で向かった。この夏の間に第9番の全体像を構想し終えると、9月の終わりにはアムステルダム、パリを経由してアメリカへ向かい、冬の間はニューヨーク・フィル首席指揮者としての最初のシーズンを精力的にこなした。第9番のスコア作成はこれと並行して進められ、春には清書を終えている。

1910年の夏にはアルマと若き建築家ヴァルター・グロピウスとの不倫が発覚し、マーラーは激しい苦悩に苛まれる。年末には再びアメリカへ向かうが、滞在中に心内膜炎が発覚し、ウィーンに戻るとそのまま帰らぬ人となった。

**第1楽章** アンダンテ・コモド 序奏に続きヴァイオリンに大らかな第1主題が現

れる。この旋律は前作〈大地の歌〉終楽章の「永遠に」という歌詞の音型を引きずりながら、この交響曲の随所で顔を出す。また序奏部でホルンやハーブ、低弦が奏するリズムや音型は、いずれも楽章を構成する主要な動機となっている。続いて複雑なリズムの綾の中から苦悶の表情を浮かべた第2主題が歌いだされる。

**第2楽章** ゆるやかなレントラー風のテンポで いくぶん歩くように、そしてきわめて粗野に レントラーはオーストリアの民俗舞曲。ここでは3種類のレントラーが交互に登場し狂乱の宴へと発展するが、のどかな気分が徐々に戻ってくる。

**第3楽章** ロンド・ブルレスケ ブルレスケはおどけた感じや風刺を効かせた音楽のこと。「とても反抗的に」という指示書き通り、各パートが主題の断片をぶつけ合いながら熾烈<sup>しれつ</sup>で目まぐるしい闘いを繰り広げる。シンバルの一閃<sup>いっせん</sup>のもと急に静まり、トランペットに導かれ雄大な世界が姿を見せるが、これは第4楽章の予兆である。闘いが突如再開し、ヴォルテージを上げつつ断ち切るように終わる。

**第4楽章** アダージョ ヴァイオリンがユニゾンで緊迫した動機を歌いだし、幅の広い歩みを持った主題へと受け継がれ、対位法風に展開されながら厚みを増してゆく。自作の歌曲〈亡き子をしのぶ歌〉からの引用なども織り交ぜつつ進む。

4楽章構成の交響曲で、フィナーレに緩徐<sup>かんじょ</sup>楽章を置く前例にはチャイコフスキーの〈悲愴〉があり、どちらも作曲家自身の死を予兆させるが、〈悲愴〉が個人的な苦悩の告白のように響くのに対し、徐々に音を減じながら長い余韻を残して消えていくマーラー第9番は、より思弁的な終末の表現であるように思われる。

（江藤光紀 音楽評論家）

作曲：1909～10年／初演：1912年6月26日、ウィーン／演奏時間：約81分  
楽器編成／フルート4、ピッコロ、オーボエ4（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット3、エスクラリネット、バスクラリネット、ファゴット4（コントラファゴット持替）、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ2、打楽器（大太鼓、小太鼓、グロッケンシュピール、銅鑼、シンバル、トライアングル、鐘）、ハーブ2、弦五部

8/27

土曜マチネー

8/28

日曜マチネー

Maestro

## ブラームス

## ピアノ協奏曲 第1番 二短調 作品15

ドイツ・ロマン派の大家ヨハネス・ブラームス(1833~97)が25歳の年に完成した、初の大規模管弦楽作品。1853年9月のシューマン家訪問を契機に、作曲家として本格的な一歩をのし上げたブラームスは、翌1854年春に2台のピアノのためのソナタを書き上げた。だが満足はいかない彼は、最初に交響曲化、次いで第1楽章を生かしたピアノ協奏曲化を企図。新たな第2、第3楽章を創作し、盟友ヨアヒムやシューマンの妻クララのアドバイスを受けながら、1858年2月に本作を完成した。初演は1859年1月、ブラームスのピアノ、ヨアヒムの指揮で行われ、不成功に終わったが、その後徐々に真価が認められるようになった。

曲は、古今のピアノ協奏曲の中でもとりわけスケールが大きく、当初不成功に終わった原因とされる要素、すなわちピアノの名人芸の華麗な披露を欠いた(しかし技巧的には難しい)シンフォニックで重厚な作りが、際立った特徴をなしている。ピアノと管弦楽が対等に扱われた“ピアノ助奏をもつ交響曲”とも呼ばれる構成によって、力感と情熱に溢れた音楽が展開。第1、第2楽章が6/4拍子という珍しい配置も曲調に広がりをもたらしている。

**第1楽章** マエストーソ 冒頭で劇的な第1主題が提示され、ピアノが静かに加わった後、ロマンティックな第2主題が出される。以後、両主題を中心に壮大な展開を遂げる。

**第2楽章** アダージョ 長調の緩徐楽章。草稿には「主の御名の下に来たれる者に祝福あれ」という祈祷文が記されていた。優美な主題に基づく、まさに宗教的な音楽で、1856年に亡くなった恩人シューマンへの追悼の意がこめられているともいわれる。

**第3楽章** ロンド、アレグロ・ノン・トロポ 歯切れのよい主要主題に長調の副主題が二つ挟まれた、活気溢れるフィナーレ。終盤に「幻想曲風に」と記された短いカデンツァが置かれ、長調で力強く終結する。

〈柴田克彦 音楽ライター〉

作曲：1854~58年/初演：1859年1月22日、ハノーファー/演奏時間：約44分  
楽器編成/フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ピアノ

## メンデルスゾーン

## 交響曲 第3番 イ短調 作品56〈スコットランド〉

ドイツ初期ロマン派の代表格フェリックス・メンデルスゾーン(1809~47)が完成した最後の交響曲。1829年4月、20歳の彼は初めてイギリスを訪れ、ロンドン滞在後の夏にスコットランドを旅行した。そして、エディンバラにある悲劇の女王メアリー・スチュアートゆかりのホリルード宮殿脇の廃墟の礼拝堂を見た際に、本作の冒頭部分を着想した。ただし本格的な作曲開始は、10年以上を経た1841年の夏。1842年1月に完成され、ライプツィヒ・ゲヴァントハウスの演奏会で作曲者の指揮により初演された。なお、メンデルスゾーンの交響曲の番号は出版順で、実際は1→5→4→2→3番の順に完成されている。

曲は、“音の風景画家”と称された作曲家一流の音画的手法と古典的な交響曲の様式美が融合した、流麗かつ堂々たる音楽。各々内容的には独立した4楽章が続けて演奏される点が大きな特徴で、これは作曲時期に近いヴァイオリン協奏曲と同じ形でもある。また主題に関連性を持った第1楽章の序奏と第4楽章のコーダが単独部分といえるほどの長さで曲想を有している点も特徴的だ。

**第1楽章** アンダンテ・コン・モート~アレグロ・ウン・ポーコ・アジタート 物悲しい序奏の後、哀愁を帯びた主題を中心に力を増し、交響詩風の音楽が展開される。

**第2楽章** ヴィヴァーチェ・ノン・トロポ 長調で2拍子の軽快なスケルツォ。細かい動きの主題を中心に進み、スタッカートの下行主題も加わる。

**第3楽章** アダージョ 雄大な緩徐楽章。憂いを湛えた息の長い主題を持つ長調部分と、付点リズムが特徴的な葬送行進曲風の短調部分が交替する。

**第4楽章** アレグロ・ヴィヴァチッシモ~アレグロ・マエストーソ・アッサイ 一転して激しくなり、冒頭に奏される勇壮な第1主題を主体に進行。木管が出す第2主題も加わる。一旦休止後、長調のコーダに移行。悠揚たる主題を中心とした壮大な音楽で終結する。

〈柴田克彦 音楽ライター〉

作曲：1829~42年/初演：1842年3月3日、ライプツィヒ/演奏時間：約40分  
楽器編成/フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、弦五部

8/27

土曜マチネー

8/28

日曜マチネー

Maestro